
「病状は、ただの中二病かと思われます。」

描述 氷菓

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「病状は、ただの中一病かと思われます。」

【Z-コード】

N91820

【作者名】

描迷 氷菓

【あらすじ】

注意く中一病患者が書いた小説です。>

俯いていた。

いつから僕はこんな歩き方するようになったのだろう。

ずっと前を向いて歩いているつもりだった。

もしかしたら、ずっと俯いてたのを隠していたのかもしれない。

「俺といふと傷つくだけだから」と言って僕は彼女と別れた。

「落ちたらやだから」と言って志望校を下げた。

「下手だから」と言って好きなスポーツの部に入らなかつた。

「めんどくさい」と極力、人と話さないようにしてた。

僕は、諦めていたんだ。

大好きだつた彼女に捨てられるのが
不合格通知を見るのが
他人と比べられるのが
人に裏切れるのが、

怖かつたから。

ずっと逃げて、逃げて、追いかけてくるものから逃げてばかり。
壁が立ちはだかると横道を通つて、スルリと抜けて。
楽なほうを選んできて、努力もしないで酸素を吸つて一酸化炭素を
出していただけだった。

僕を愛してくれた彼女も

最後まで「志望校を上げなさい」と言ってくれた親や塾の先生も

「上手くなつたよ」と楽しさを教えてくれたコーチも笑わてくれた友人も

こんな僕にどうしてここまで優しくしてくれたのだろう。

僕は感謝すべき彼等に何かあげられることができたのだろうか。

何も持つてない僕が何をあげられたのだろうか。

僕は何をもつてるのだろう。

優しさ？

懸命さ？

知識？

積極さ？

才能？

本当に僕はそんな大層なものを持つてるのか。

欲しい。

僕も、彼等のようなものが欲しい。

どこにあるんだろう。それは。

形がないものだということは分かっている。

探しにいくつ。

僕らしきを。

(後書き)

最近、プチ病み。
それで執筆したらこうなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9182o/>

「病状は、ただの中二病かと思われます。」

2010年11月14日22時58分発行